

わが愛する歌

—名歌鑑賞—

二反田

實

思ひやる心は君に添ひながら 何の残りて恋しかるらん

閑吟集（小歌八四）

（新日本古典文学大系56）より

小学生の頃によく私の家に来て針仕事などをしてくれていた母の長姉にあたる伯母が、口ぐせのようにつぶやいていた歌の文句がどうしても忘れることが出来ません。「ある時は、ありのすさびに憎かりき なくてぞ人は恋しかりける」と言うものでした。未だに出典がわからず捜してはいるのですが。

閑吟集の「小歌」を、始めとしたら伯母の歌は終りを示す「恋」の人情なのではないだろうか。思う君に全て付き添って将に「憑（つく）」如き私の「思ひやる心」なのに、いったい何が残っていてこんなに恋しいのか、と恋の春と夏を歌っているように思われ、「ある時は」の方は、その後の過程と、結末と、のこされた者の苦い思いが、表われているように思われて、並べて味わうとなかなか面白い。秋と冬を感じないわけにはゆきません。やはり閑吟集「小歌一九九」に「人の情のありし時 など独寝をならはざるらん」というのもあり、私にはさらにしみじみと恋の始終を知らされます。

所で、同じ閑吟集には「憂きも一時 うれしきも 思ひ醒ませば夢候よ」というのもあります（小歌一九三）。幸い私も老境の身ですから「春・夏」の恋からは解放されていると知るべきでしょうか。

卷頭言

明治四十四年（一九一一）六月一日、青鞈社発起人会が開催された。その三ヶ月後『青鞈』が創刊される。「原始、女性は実に太陽であった。真正の人であった」というよく知られた言葉は、二十六歳の平塚らいてうによって書かれた。創刊号に与謝野晶子は「山の動く日来る　かく云えども　人はわれを信ぜじ」の詩を寄せる。

明治女歌の夜明けを告げたのは、与謝野晶子である。『みだれ髪』で「やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君」と詠って熱狂的な支持を受け「やは肌の晶子」と呼ばれる。また「乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬこなる花の紅ぞ濃き」と性愛の扉を押して官能の歓喜を大胆に歌い上げ、浪漫派歌人のスタイルを確立した。

然し晶子は優れた女流浪漫派歌人であっただけではない。召集され旅順攻囲戦に加わった弟を嘆き『君死にたまふ事なかれ』を発表。大町桂月に「家が大事也、妻が大事也、國は亡びてもよし、商人は戦ふべき義務なしといふは、余りにも大胆すぎる言葉」と批判され、「たいさう危険なる思想と仰せられ候へど、当節のやうに死ねよ死ねよと申し候こと、また何事にも忠君愛國の文字や、畏おほき教育勸語などを引きて論ずることの流行は、却って危険」と反論し、「歌はまことの心を歌うもの」と一蹴する。

山動く日の来たことを与謝野晶子は心底認識していた人間であつたことを歌人は知らねばならない。

（松岡）

太陽の舟 目次

三十二巻 六月号（通巻三〇六号）

わが愛する歌　―名歌鑑賞―

二反田　實

卷頭言

松岡　三夫

二十五首詠

山田　玲子

阿部正路論（第一〇四回）

須藤　宏明

歌誌散見（第八十回）

豊泉　豪

作品Ⅰ

塩田　秋子 他

四月批評（作品Ⅰ）

宮原喜美子

（作品Ⅱ）

富永　道子

合　評（座談会）

角田　順子・土方　澄江

選者十首

酒向　一次・渡辺　幸子

秀歌拔芳（三〇四号）

高崎　邦彦

作品Ⅱ

森田　勝昭 他

作歌の目・作歌の技法（第六十五回）

三木　勝

太陽の舟第十二回全国大会　詠草

山田（紀）・末次・石塚・松岡

歌会・支部報告 他

編集後記

題字

阿部正路

表紙

イラスト

阿部正冬

戦時を語り継ぐ

山田玲子

三年余母を看とりし若き父優しまなざし今もありあり

妻亡くし失意の父はわれを連れ故里出でて流離の旅へ

知り合ひの伝^{つて}を頼りて赴任する父は幼きわれを伴なひ

雪深き信濃の国で父と子の日毎きびしき戦時の生^{たつき}計

戦時なれば衣料も米も配給に切符きれば皆で野草^{くさ}摘む

公^{おおやけ}の仕事につきし父ゆゑに隠れて食糧調達出来ぬ

母親の形見の着物携へて食糧に換ふわれ小学生

母亡き子を農家の人は憫れみて米や野菜を分けてくれたり

担任の住山先生下校時に「大丈夫」かと声かけ下さる

先生のメガネの眼差優しかり戦闘帽にゲートル姿

米二合背負ひ行きたる六年生修学旅行高原の春

級友らと声を掛け合ひ一列に頂上目指す一步一步に

山小屋にランプの明りほのかにて毛布にくるまり友と笑み合ふ

戦中の灯火管制きびしかり明りを覆ひ夕食を摂る

制服は入学式のみもんぺ穿き防空頭布携帯の日々

名ばかりの女学生なり出征の兵士の家へ勤労奉仕

養蚕に田植え稲刈り馴れぬ手に心細かり日の暮るるまで

農作業の合間に頂くふかし芋友らの顔も満面の笑み

学校も軍需工場に様変わり上級生は鉢巻締めて

校内に終日機械のひびきゐるて航空兵のセーターを編む

乙女らは国のためにと一心に飢餓に耐へつつ働き通す

敗戦の混乱の中ころころ決め看護婦学校へ入学したり

人のいのち看とる仕事を選びしは戦時を耐へし源なれば

夜を通し緊急手術終へしとき明けのカラスの声しみじみと

雪解けの信濃の春は美しき杏あんずの花の甘き香りの

阿部正路論（第四百回）

阿部正路論

須藤 宏明

—素人の短歌・生活の素人—

戦後、那須で農場経営の衝にあたり、自ら田に入って苗を植え、鎌を取った平田松堂に対して、阿部正路は、

私から見れば平田さんは、伯爵であるよりも、東京美術学校の教授であるよりも、何よりも『百姓の短歌』の著者であることがすばらしいのです。（中略）何よりも尊いのは、美術の専門家でありながら、素人として短歌を作りつづけたことにあると思います。（『新・短歌への招待』日貿出版社・一九七四年・二頁）

と述べている。平田は、田を耕し、農業に従事する苦しみも多く歌っているが、土に生きる喜びをも歌っている。これが、『百姓の短歌』の短歌の大きな特徴であり、プロレタリア短歌と大きく一線を違えるところである。平田の百姓であることの喜びの歌とは、どのようなものか。

下野の湯津の荒土吾がすけば那須野の原は少しくづれぬ
何へクトール吾に鋤かれて黒々と新長方形を正しく表現す
力強く肉体労働つづけきてどうやら解りかけし百姓なる

かな

百姓の吾に自負するものもなく平凡の間に田植え来たりぬ
新しき地下足袋はきて土ふめば那須野の秋の音ばたんと
かへる （『百姓の短歌』日本文芸社 昭和三十八年）

一首目、二首目は、土に向き合い、新しい創造をしたことに對する喜びを歌っている。三首目、四首目では、百姓のなんたるかがわかりかけてきたと言いつながら、自負するものはないと言う。平凡の中に田植えという行動があるという自覚は、もはや、百姓が自己の中で日常化している、悟りに近い心境である。百姓をすることによって世を改革するということでもなく、高尚なディレクタント趣味での気取った百姓でもなく、生活のため、生きていくための、自然体としての百姓である。こういう心境に達しているから、新しい地下足袋を履いた時に、那須野の大地の秋の音が、すんなりと落ち着いて聞こえてくるのである。日常の生活の中で、自然という大地と一体化した時にのみ、聞こえて来る音であろう。プロレタリアとは、無産者、つまり、動産や不動産という財産を持たぬ者を言う。少ない財産を嘆くのではなく、少ないけれども財産を有し、それを活用し耕すことの喜びが『百姓の短歌』に歌われている。

このような生き方を、阿部は「尊い」と捉え、そこに生活人としての、短歌の素人を見いだしたのである。短歌の素人ではなく、生活の素人であることの重要性を阿部は見いだし、そこら歌われる短歌が尊いのである。

歌誌散見 第八十回

豊 泉 豪

「レ・パピエ・シアンⅡ」①

「レ・パピエ・シアンⅡ」は三重県松阪市の大辻隆弘方「シアン」の会」を発行所とする月刊同人誌である。手許に「レ・パピエ・シアン」旧号および「レ・パピエ・シアンⅡ」創刊号がないため直接確認できないが、同誌は一九九九年に大辻、小林久美子ら当時二〇代、三〇代の関西在住歌人を中心に創刊されたという。二〇〇八年までに一二〇冊ほど刊行し、翌〇九年から同「Ⅱ」として号を改めた。同人には大辻、小林をはじめ、渡部光一郎、藤井靖子、山吹明日香など「未来」の所属者が多いが、いわゆる結社内同人誌ではない。出発時の性格を今も保持し、昭和三〇年代から四〇年代生れの、関西圏に在住するメンバーを主とした同人誌となっている。

一〇年三月に発行された十五号には、十二人の同人が概ね十首ずつを発表している。「現代詩をよむ」と題した特集では、キタダヒロヒコ、山吹、大辻、酒向明美、服部一行が、それぞれ小笠原鳥類、園田恵子、三角みづ紀、山本聖子、谷川俊太郎といった現代詩人の作品を取りあげて鑑賞し、あるいは自らの思いを語っている。何らかの方向性や積極的な編集構成の意図を持った特集ではなく、思い思いに書かれたエッセイを集めていると思われるが、内容は充実し、読み物として楽しめるものになっている。中でも大辻による三角作品の分析、酒向による山本作品の紹介に注目した。短歌を作る者に

とって、隣接する詩や俳句の、特にも現在生み出されている作品に注目していくことが大切であるのは論を俟たないが、実際にはなかなか難しい。その意味でも同人誌でのこうした企画は大変意義深い。なお、こうした特集は毎号必ず組まれ、そのテーマは「スイーツを読んだ歌」などといったやわらかいものから、近現代の歌人を取りあげたもの、時事詠の競作、源氏物語、大伴家持、萬葉集合評など、非常に幅広い。また、現在の連載は大辻の歌論「戦後アララギを読む」(十四回)と、服部一行のエッセイ「INCOGNITO MODE」(十五回)である。大辻の論はこれまで柴生田稔の『麦の庭』の作品を一首一首丁寧に評釈してきた。次号から小暮政次の戦後歌集に移るとある。前号評は八人の同人がそれぞれ二〜四首ほどを取りあげて執筆しており、紙幅も充分に取られている。編集は藤井と山吹が一号ずつ交代で担当している。雑誌の体裁は、本紙に薄い水色の紙を用い、それよりもやや濃い水色の厚手の用紙を表裏紙に使っている。誌名の「シアン」は印刷などで用いる色の名前―明るい青―でもあるから、全体で「青い紙」と和訳することができる。まさに名が体を表わしている。大きさはB4判二つ折りのB5判で、ホチキス止めの簡易な形態ながら、潇洒なつくりになっている。なお、表紙画および本文中や裏表紙のイラストは小林によるものである。次号から短歌作品を鑑賞していく。

巻頭「子規の四季」と題するコーナーでは、毎号「〇月の子規」として、松山の子規記念博物館学芸員でもある渡部が選んだ子規の一句を編集は藤井と山吹が一号ずつ交代で担当している。

四月批評（作品Ⅰ）

宮原喜美子

・ 忘れたる帽子渡さむと走り来し清しき笑顔蕎麦やの乙女

佐伯 朋子

店の少女が親切にも小走りで、忘れ物の帽子を届けてくれました。「ありがとう」と感謝する作者の声が聞こえてきそうです。

・ ひとり居の遺書ともならむ老いてまた日記書き継ぐ大学ノートに

庄司 久恵

かつて、私にとって日記が心の内の思いを吐き出すための道具であった頃、結果としていつまでもその思いに束縛されるような気がして、書くのを止めてしまいました。作者は、理由はともあれ、中止していた日記を再開されました。それもかつてと同じように大学ノートに。これから日記と短歌が、作者を支えて行くことでしょう。

・ 本箱にずらりと並ぶ吾の本忘れられたることも知らずに

土屋 道子

勉強家で読書好きの作者。衰えを感じつつも、本への愛情を軽妙にうたっています。年齢に関りなく、いつも学んで行く作者の生きる姿勢を見習いたいと思いました。

・ 滝しぶき厳冬耐へし水草の若芽濡らして春を告げおり

・ 山ざくら散り交ふ花びら溪川の水にたちまち乗りてゆきた

り

梅野 路

「ふるさと春光」と題する七首は、あふれる春到来の喜びをたっぷりと表現しています。溪川の水音、滝しぶき、山ざくらの花びらの散る様子など、目、耳、肌と全身で春を感じている作者です。溪川の水が雪解け水であれば、喜びは入でしょう。

・ 銀行退職二十三年なほ吾を慕ふ顧客ら数氏の賀状

土橋 茂徳

作者の温かな人柄が思われます。おそらくは、顧客というよりは、家族の様におつきあいされたのではないのでしょうか。「仕事」は、長い間に「仕事」でなくなりました。

・ 野分け吹く芒が原を歩みゆき吾れ呼ぶ母の声を聞きたり

三木 勝

母とは、いつも吾が内にあり、時に外在して気配を感じることさえある不思議な存在です。野分けのビュウビュウという風の音の中に母の声を聞いた作者。激しい風の中で聞いたとは。作者の母の人生に思いを馳せます。作者は、母と対話し心の平安を得たでしょうか。

・ 里山の雨に濡れている竹林無言のままで吾を見詰める

・ 風すさぶ川の流れのささ波は羽のごとくに横に揺れおり

森 五貴雄

雨で重くなった竹林の竹は、頭を下げて人の形の様になり立ちつくしています。又、作者は、くり返しくり返し流れてくるささ波の動きをじっと見据えて、小さな変化を捉えます。作者の孤独感が伝わって参ります。

四月批評（作品Ⅱ）

富永 道子

・立春が心の中まで飛び込んだ今日から変わる私の何かが

森田 勝昭

元日の次に心待ちするのが立春、躍動感と期待感がリズムを伴って伝わってきます。良いことがありそう。

・編笠を目深にかぶり踊り行くきりり嬬やか衣擦れの音

八代 陽子

旅行詠は、行ってみたくありません。行った錯覚までも呼び起こしてくれます。それぞれの地を詠み著わす特別な感慨が込められているからでしょう。きりり嬬やか衣擦れ。

・新春を寿ぎてメジロ鳴く窓に近寄り見れば富士が透けたり

大橋 俊弘

新春のめでたさにメジロも鳴いている。窓からは富士山も見える。心の中まで温もるめでたさの重なり。

・会う度にすまぬすまぬと云いし母我も行く道いとしさつる

角本 静江

つい先達でまで、誰の考えにも動じなかった母の言葉が「悪いねえ」「ありがとう」に変わってきた。これらをしみじみ言われると胸がつまります。やはり母に会いに行こうと決心しました。私も母に逢ってきたばかりだったのに……。

・枯れ草の匂ひは幼き日を戻す記憶の襷より拾ふ誰・彼

岩橋千代子

子供の頃の遊びや仲間達がよみがえってくる。郷愁と感傷が読み取れて、切なく懐しい。幼き日を戻すで良いでしょうか。幼き日へ戻すでは当り前すぎますか。

・冬晴れの空の青さを散策のあいさつにする見知らぬ隣人

梶川喜與志

見知った人でなくても行き交う時のあいさつになるほど冬晴れの空は青い。重くどんよりとした冬の空でありがちだが、時々深く澄みきった空となる。春への万人の期待であり、表現した作者の視線を知る。

・如月の風冷ゆるなり鎮もれる冬田の中の白鷺一羽

木村百合子

一番寒い如月、ひくとも動かぬ立ちん棒の白鷺や、雪を染める紅い山茶花や、ハープに似る雪吊りの姿など、静けさの中にも時間は止まらず流れていると感じる。

・黒豆を炬燵に入りて選り分ける同じ作業した亡夫想いつ

久保田美智子

一粒一粒選り分けながら、亡くなった夫君を偲んでいる。炬燵の温もりに癒されながら。

・切られても死なないという夢を買う染色の良いドライフラワー

熊谷 香織

生花には終りがあるがドライフラワーは長持ちする。死への拒絶を、夢を買うと表現し、染まった色にこだわって拒絶は強められた。

合評

座談会

司会 では、本年六回目の合評をはじめます。今月は四月号掲載の中から四首選んで行います。先ず最初は、千葉支部の野村富久子会員の

温きへやで雪ふる外の野良猫を心配するわれ矛盾にみちてです。Iさん、どうでしょうか。

I この歌は七首の中の一首なんですが、一番出来が良くない。と言うのは、歌に体験の逼迫性がない。「矛盾にみちて」が概念的である。フレッシュさがない。

S 私は初句の「温き部屋で」を「温き部屋に」としたい。一首の独立性の問題もありますが、この歌の主題は「矛盾」だと思えます。野良猫にまで身内のように気を使ったりし、餌を与えたりしながらも飼うことをしない、と言うか出来ない悩みを詠んでいると思いました。

Y この作者はいつも自分の正直な気持ちを飾らずに詠んでおられますけど、この歌は一寸、散文的すぎるのではないかしら。このような歌が現代的な歌なのかもしれないけれど、人は誰でも矛盾に満ちているのですが、この歌の場合は「矛盾」と言えるのかなあ、と思いました。

T この歌の表現は倒置法ではないので、結句の「みちて」は「みてり」に直します。作者は野良猫を飼おうとしないで心配だけをしている自分は矛盾に満ちている、と詠んでいるけれど、歌としては野良を野良として視る冷徹な目で、もう少し深く追求したほうが良いですね。この一首を連作七首のまとめにするのは一寸、弱いです。

司会 それでは、次は大田支部の渥美崇子会員の

語りたき友もあらねばただひとり寒き季節の過ぎ行くを待つです。どなたからでもどうぞ。

T 私はこの歌はこのままで良いと思う。どこも直すところはない。孤独感を越えた孤独を歌っている。「ただひとり」と言い切っているけれど悲壮感がない。この強さはこの作者の特徴ですね。

Y この歌を読みますと、なんとも言えない寂寥を覚えますけど、悲壮感がなくてむしろ達観があり、百歳を越えている作者を思うと、あっぱれ、と言うほかはないですね。

S 作者が百歳を越している事は、太陽の舟の人は皆、知っているし、尊敬の的です。

I 私は「ただひとり」が一寸、強すぎるように思う。これが無いともっと良いと思う。

T 「ただひとり」というのは、生きている作者の実感だから、このままで良いと思う。

I 私の意見としては、「ただひとり」をもっと薄めて淡々と詠むか、例えば作者の居る場所をここに入れたらどうかと思います。

T 若い人が「ただひとり」と言うのと嫌味になってしまうけど、作者の年齢を思うとこのままで充分ですね。

S 私は今、八十一歳ですけどあと二十数年も生きて、このような歌が詠めるかどうか、と考えてしまいます。本当に尊敬します。

T 作者に添って歌を評価するのも大事だと思う。

司会 三首目は柏支部の石塚立子会員の

グリーンルン電子レンジが回ってるママが作った僕のスーブだ。です。いかがでしょうか。

Y 働いているママに代わって、作者が孫をみている時の歌

です。孫のかわりになって歌っているの、こういう歌も楽しくて良い思い出になりますね。

S 作者の七首を全部読んでみようと、確かにママに代わって発熱した孫をみていたというのがわかります。ただ、こういうふうにな一首だけを掲出されると、孫の歌ではなくて作者自身の歌と思われそうですね。

T そうですね。この一首だけを読むと、どうしても充分に伝わらない弱さがありますね。孫の気持ちを付度して歌うという歌い方も面白いです。

S 私もこうゆう作歌法があっても良いかな、と思います。

T 作者にしてみれば、こんなに面倒をみてやっているのに孫は「ママの作った僕のスープだ」と言っている。大人の世界を越えて子供の正直な気持ちを歌にしているのは新しい試みではないか、と思いますね。

司会 この歌を選んだのは、視点の転換というか、作者がオノマトペを使い、子供になりきって歌っているのが面白いと思っただけです。Iさんはどう思いますか。

I 私としては、視点を転換して作ったという新しい短歌形式の試みと云うのは賛成できません。第一印象は幼児向けの童話として、楽しい作品だ、というものです。これなら短歌に、定型に拘る必要はないと思いました。この中にどのくらい童話的な詩の成分があるかが重要です。上句は秀逸、下句はいまひとつと思います。

T 短歌と童話は違う。短歌は三十一文字の中に作者の感動の焦点を凝縮させて読者に伝える。この場合、下句に作者の感動の焦点があり、やはりそこが歌人としての視点があると思う。これは短歌であって童話として読む作品ではないと思う。

司会 四首目は、渋谷支部の北川昭会員の

励ませる 赤字の会社の行く末を切り開かむや精の限りにです。どなたからでもどうぞ。

Y 私は一字あけは要らないと思いますね。

S そうですね。私も一字あけの意味がわかりません。

I 「励ませる」という言葉はありますか。

T あります。「励ませる」は「励む」という動詞の未然形に使役の助動詞「す」の連用形「せ」と自発の助動詞「る」の終止形がついた形で、文法的には間違いではないです。解釈は「励ませられる」とか「心が奮い起こさせられる」というふうになるでしょう。

Y そうすると、作者は誰かに励まさせられている、ということでしょうか。

T そうです。赤字の会社を立て直す事に作者自身が奮い起こされていると解釈できます。

S 作者の決意を表わすために、ここで一字あけが必要になってくるんですね。

T 問題は、四句目の「開かむや」です。作者の強い意志や願望を表現するのなら「切り開きたし」のほうが良いです。

I 私はどうしても初句「励ませる」は唐突で露骨な感じがします。

T もし、作者が「励ませる」を「励ましている」という意味で使っているとしたら、文法的には間違いです。

Y あまり難しい言葉は使わないほうが良いですね。

T 使う事に問題はないですが、文法的に間違っ危険性があるから、気をつけて使いたいですね。

司会 本日はこれで終わります。ありがとうございました。

(記録 山田 紀子)

選者 角田 順子

☆今日笑ひ明日は悲しむ生き方に我が立ち位置の未だ決まらず
森本 元昭

散り来たる終の一葉てのひらにこころ寄りゆく芽吹き逢ひに
諸 幸子

編笠を目深にかぶり踊り行くきりり嬬やか衣擦れの音

八代 陽子

過ぎし日に風土記を学びし師の賀状「楽しかったね」と添

へ書き嬉し
山田 玲子

湯ざめして苦吟の一首まだ成らずあせる心に終電が過ぐ

湯本 いと

一握の後遺症なく完治せり人様の恩義感謝あるのみ

よしだゆきお

シャンプーのオレンジ色の美しさ一瞬思ふ豊かな時代

吉田 律子

いちめんの菜の花、水仙匂い立つ春色浮き立つ房総の冬

渡辺 幸子

認知症の講習を受く願きて他人事でない明日はわが事

浅見 時子

☆黒豆を炬燵に入りて 選り分ける同じ作業した亡夫想いつ

久保田美智子

選者 土方 澄江

雪混じる風の通り路あきらかに樹々片白く朝の日を浴ぶ

小林 絢子

去りてゆく日日の早さに驚きぬ風はしづかにわが髪を撫ず

河野 静子

電車待つ帰りの風の冷たさも孫の笑顔の余韻に温し

杉本 和子

夫婦して葉飲まずに生きる日々これで十分感謝に生きる

菅谷 幸子

介護する者のみの負と思はれぬ病みゐるは尚哀しかるべし

月田 藤枝

枕辺にケイタイ手帳財布置き大事なきよう独り居の夜

富原 澄枝

☆今日笑ひ明日は悲しむ生き方に我が立ち位置の未だ決まらず

森本 元昭

謳歌する自由のうらに不安あり老いの坂道日毎に歩む

吉岡悠紀子

☆語りたき友もあらねばただひとり寒き季節の過ぎゆくを待つ

渥美 崇子

ふくらみし蕾に慈雨が降り注ぐ梅のいのちは白く光りて

梶川喜與志

選者 酒向 一次

淹しづき厳冬耐へし水草の若芽濡らして春を告げをり

梅野 落

書きつけた他愛ない文字陰うつな臭気を放つ不逞な構図

原田 寛

阿蘇の山路行くほど樹氷深まりて白き視界は冬の華なり

松木 昭子

蠟梅の黄珠のままに七つ八つ落ちて寄りそふ生垣のそと

松本 啓子

野分吹く芒が原を歩みゆき吾が呼ぶ母の声を聞きたり

三木 勝

吾よりも長く寄り添うかもしれない今編み上げし娘のセー

ター

払へども尚払へども纏ひつく我執の衣を今日も着にける

森本 元昭

☆語りたき友もあらねばただひとり寒き季節の過ぎゆくをま

つ

バス待つ間話上手な人のゐて尽きせぬ話題に寒さ遠のく

岩橋千代子

冬深きわびしさならむ罪^ひ罪^ひとして雪降り積もる如月の夜

木村百合子

選者 渡辺 幸子

暖冬に葉陰に見つけし落の臺やり過ごしては春まで待たな

杉山 榮子

熟したるキンカン皆無^{こぞ}去年の冬ジャムの夢食むひより親

子

雨止みし日暮れの森にかへり来し鴉のむれの高鳴きつづく

鶴来けい子

ももと云ふはこの様な中から生れしか燃ゆる紅葉につつま

れしとき

参拝のほど良き疲れが安らぎの眠気を誘うローカル電車

上田ヤイ子

立春を間近に控え吹きつけるみぞれの嵐に梅花震える

梶川喜與志

夜又となる心の奥をひた隠し現世に生きる吾の在りたり

河口 礼子

ものものとすれ違ふとき出づる音冬の蜩をがしがし洗ふ

木村恵美子

八十年生きこし友は手の震え恥ぢらいつつも認^{した}めて来ぬ

久保田昭江

☆黒豆を炬燵に入りて選り分ける同じ作業^{こと}した亡夫想いつつ

久保田美智子

庭隅に返り咲きぬしクレマチス夫かとぞ見て仏花まる
らす
杉山 榮子

巻頭二十五首詠は、自らが過ぎ来しの日々から感受する自然界の美しさと生活の息遣いが調和した見事な短編小説の趣を持って私に迫る。私も自然の豊かな鴨川に越して来て、自然界のもたらす自分自身の心の変化に今興味津々の状態であるだけに、この二十五首詠は一入心に沁みる。季は冬。拔芳歌はその嚆矢の一首。夏に咲き終えたクレマチスの花が庭隅に返り咲いた。亡き夫の帰りを夢に見続ける作者の切ない思いは「仏花まるらす」の現実認識で一層切なさを増す。そして月「外に出れば雪かと紛ふ月光は異界の気配に冴えわたりたり」、月は異界の光。冬の月の冴え冴えとした冷たさは正に異界。しかし作者の真の姿は異界の物として見る事を許さぬ覚めた目を持っているのである。そこに到る作者の人間としての営みと暖かさが、「万年青組み梅枝添へて春迎ふ新しき年いやしけ吉事」から掉尾の一首へ収斂して行く。もちろん抽出歌は、万葉集最後第四千五百十六番大伴家持の「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事」に深く重なる。そして「めぐり来し陸月満月身に降りてかぐや姫でなき吾に生あり」と自らの生の確信を得てこの二十五首は完結する。もちろん作者の生の完結はまだまだ先であ

る事は言うまでもない。
なにがなし言問ひたげなり葉の落ちし枝の間に浮かぶ
白雲しゆくも
佐伯 朋子

いつも自然と対話しながら、純粹で美しい心の世界を詠い上げて来た作者の会心の作と言えよう。晩秋の葉を落した枝の間から、葉が繁っていた時には見えなかった白雲が浮かんで動かない。枝の間だからこそ動かぬ事が深く心に沁みる。そして雲と目線が合った時作者は雲の言問いたげな思いを感じ取った。「問ひたげなり」と断定して二句切れにした事で、読者は作者が雲と会話した事を実感する。

夕暮れの無言の列の新宿がぞろぞろと今日も過ぎ
ゆく
鈴木美智子

鈴木さんの歌はいつ読んでも驚ろかされる。そして面白い。例えば二月号「第九の日アルト・テノール・ソプラノと劇場一つムンクの叫び」大劇場全体を見事に一つの色に染め上げた。拔芳歌、新宿のどこかでは無い。駅も通日も劇場もそこに存在する無言の人間集団を新宿と言う一つのパッケージに納めてしまった。そしてそのパッケージは毎日動き続けている。これからも注目して行くと思う。

何となく今年は良き事あるごとし赤きマチスを壁に掛
けたり
高橋 和子

前々号 (304 号) 秀歌拔芳

「何となく今年は良きことある」とし元旦の朝
晴れて風なし」は啄木の歌。上句は啄木の歌その
まま。本歌取りと言うにはあまりに大きすぎるか
も知れない。しかし、同じ元旦を描きながら、啄
木と作者の感性は真逆。風の無い晴天に対し、作
者の風景は真赤。おそらく「大きな赤い室内」と
題する絵であろう。その強烈な赤は作者の生の焰
啄木のすました下句より、私は数倍作者の下句に
魅力を感じる。

明けそむる空とつかのま響きあひ水平線は紅をはく

玉川 愛子

「冬の海」と題する七首、山里の住人になってその
山里に魅了されていた私にしみじみと海の美しさと力
強い生命力を思い出させてくれた。私の故郷の冬の海
はもっと激しく暗い。だからこそ私は拔芳歌の澄明な
早朝の風景に強く引かれる。冬の早朝の凍て付く空気
は澄み渡り、空と海の境界線はしばし混沌とし、やが
て太陽が顔を出してその混沌は美しい紅に染まり峻別
する。何度見ても言葉に出来ない世界だった。

落ち込むも昨夜の不満もたあいなきふたつよいこと欲
せし吾か

照山 好子

それは『健康に感謝し生きむ唱へたる「ふたつ
よいこと、さてないものよ」と深く響き合う。
人間の持つ不満や不足を嘆く感情は全て欲に根差
している。」「知足安分」「足を知り分に安んずる」は、

千利休の茶道理念の精神でもある。作者はそれを
「ふたつよいこと……」と分かりやすく理解しつ
つ尚それに拘泥する自己を自覚する。煩惱具足の
凡夫と思い定めて生きたのは親鸞であった。拔芳
歌はその心と通う。

あるがまま受け入れ逝きし父母の生の浅瀬早瀬を受け
継ぎ渡る

中村 陽子

父母を愛しその人生を諾って生きる作者の幸せ
をしみじみと思う。日頃の作者の穏やかな物腰を
見ているとなる程と実感させられる。親は子を見、
子は親を見てその人生を築き上げて行く物なのだ
と実感しながら私は三人の子供を見、私を見る。
「あるがままを受け入れる」事は難しい。常に浅
瀬に溺れ、早瀬に流されている自分を実感する。
いつの日か作者のように言える時を迎えたいと念
願している。

月を背にラクダに揺られ我が一行砂丘の日の出全身に
浴びる

土方 澄江

私のモロッコの知識と言えば、ジブラルタル海
峡を挟んでスペインと最短十四km、スペインに
イスラム文明を持ち込んだ国と言う事であって、
もっぱら興味はスペインにあった。ましてサハラ
砂漠の一端が含まれているとは思いません。拔芳歌
を読んで、私の中に今猛然とモロッコ
への憧れが生まれている。ラクダに揺られ全身に

砂丘から昇る太陽の光を浴びた時、一体私の中に何が生まれるのだろうか。

暖冬となりたる夜の雨の音どこかゆるりとやさしさのあり

福地 啓子

地球温暖化は悪。エコ生活をせよ。CO₂の排出を減らせ。エコ製品には減税を。今世界中気が触れた様に騒いでいる。しかし石油成金は贅沢の限りを尽くし、エコ製品を量産する為にCO₂は排出され続けている。つくづく私達は愚かな生き物で世界規模の陰謀に踊らされているのではとさえ思う。私は拔芳歌の様に、ならばそれ、有るがままを受け入れて暖冬の雨音のやさしさにたゆとてみたい。作者の心の自在に感動。

粧 風花をひとひらひとひら抱きとめ末枯れ芝草今朝雪化

山名 恒子

この「風花」は晴天にちらつく雪では無い。冬の風が立って雪がひらひらと降る事を言う。鴨川に来て分かった事の一つに、小雪が降り始めると一番先に一面白くなるのは芝生の上。それは高さも密度も揃っているからだと理解する。作者は風花をそんな末枯れた芝生が抱きとめると表現する。見事な感性と言えよう。だからこそ朝の芝の上の雪は均一で、乱れが無く見事な美が出現する。雪も抱かれる幸福に輝いている。

梅見月お向かいの庭紅色に自然と笑みがこぼれる日々

よ

尾上 貴子

「梅見月」とは陰暦二月のこと。今で言えば三月初旬から四月初旬。梅の花の盛りの頃、向かいの庭の梅は紅梅だったのであろう。東京のある裏通りを歩いた時、桜の花が道路にも他家の庭にも散り落ちていたのを見た。しかし誰も文句を言わない。美しいものを共に愛でる日本人の心は真実大切にしたい。作者はそれを日々笑顔で眺めている。その豊かな心が光る一首。

突然の町内会費の集金に持ち合わせ無しが二軒もあり

今井 芳枝

厳しい現実を衝き付ける時事詠。突然であっても町内会費、それ程の高額ではあるまい。それなのに持ち合わせが無いと言う家が二軒もあった。たまたまその時持ち合わせが無かったと言うのではない。恒常的に無いと言うニュアンスを持つ。高齢者か、失業者か。「突然」「町内会費」「二軒」これ等何の変哲の無い言葉がこれ程生き生きと事実を突き付けて来るとは。適語の使用が短歌を生かすのだと教えられる。

旅先の土産売場でうろうろと送る相手と価格が回る

岡部千代松

作者らしい少し自虐を込めた面白い歌。私は旅が多くなるとほとんど土産を買わなくなってきたので、遂にどうしても土産を買う必要が生じると、

前々号 (304 号) 秀歌拔芳

確かに拔芳歌の様な気持になる。安からず高からず、不用にならぬもの、結構面倒くさい。それを作者は「うろうろと、価格が回る」と表現した。作者のこの洒脱さを私は愛する。

雲間より冬陽の射せる畑の土種芋抱きて春を待つらん

大橋 俊弘

ジャガイモの植え付けが終った頃、作者の住んでいるあたりだと三月上旬頃か。今年は特に三月頃は寒く土中の種芋の生育が心配された事だろう。ようやく差した雲間からの太陽の温もり、それは土中の種芋の生育を助ける。土が暖まった喜びが下句の安心の籠ったやさしいたわりの表現となった。真実、農業とは目に見えぬ作物の生命力とそれを助ける土との共同作業。人間はただ、見守る事しか出来ない存在なのだ。

会う度にすまぬすまぬと云いし母我も行く道いとしさ
つる

角本 静江

日本は世界で例を見ないほどのスピードで高齢化が進んでいると言う。更にはそれとセットで少子化が進んでいる。最近ふと今まで何でもなく出来た事が出来なくて驚く事がある。「そうか、これが年を取ると言うことか」とある意味恐怖すら感じる。恐怖の正体はと考えると、今の日本の老々介護、介護施設、高齢者医療の問題へと行き着く。拔芳歌、母の「すまぬ」と言う言葉の中に老人の

置かれている全ての無惨がある。そして「我も行く道」の中にそれが個人ではどうにもならぬことの悔しさがある。今の私達が何をおいても克服しなければならぬ現実を作者は突き付ける。

夜叉となる心の奥をひた隠し現世に生きる吾の在りた
り

河口 礼子

「夜叉」についてここで語るスペースは無いが、作者が思う夜叉は悪鬼のそれであろう。激しい心を内包し、作者の歌には常にその心の葛藤が詠まれて来た。そして拔芳歌も又、種々の葛藤の中で自らを見据えた時、作者は自らの心奥を夜叉と表現せざるを得なかったであろう。しかし夜叉は仏教に入って鬼子母神になった。作者もそうであれかしと願う。

再びの大雪となる今日立春零下十度の吹雪懐かし

工藤 和子

今年の立春は二月四日。私の予想では最も厳寒の頃と思われるのだが、どうやら立春の頃は冬の寒さの柔らぐ頃らしい。大雪とはなったが、立春になって、零下十度にまではならない。そんな春を迎える喜びが、逆説的に下句となって表現された。私は小檜山博の「地吹雪」に感動し、雪の恐ろしさを実感したが、作者はそんな吹雪が懐かしい程に立春がうれしいのだ。雪国に住まねば理解出来ない感覚かもしれない。

作歌の目・作歌の技法(第六十五回)

作歌の技法(長歌編・3)

三木 勝

現代の長歌は、現代でなければならぬ。形式は伝統的な長歌の形式を踏みつつも、伝統の形式を墨守するだけであってはならない。伝統にとらわれず、長歌の形式を道具として、現代を、そして現代における自己を表現していかななくてはならない。

言葉なく

久保田昭江

日曜の朝のホームに着く電車空席はなく走り出す揺れに耐へつつ鉄柱に腕からませるわが肩へサインをくれて席すすむ振り向く吾れへ目もくれず左手に持つポット上げさりげなきまま窓へ向く息子ほどなる年なるや乗り換え駅への降り際に視線送れど届かざり心に礼を重ねつつホームへ降りぬ今朝の空昨日に変わり晴れ渡る姉の忌に行く秋彼岸ふる里までの数時間今日のひと日の灯りとならむ

反歌

姉逝きてふたとせ過ぐる秋彼岸義兄と和める日の続きるむさりげなく席をゆずってくださった方の行為が、叙事の部分として語られる。その叙事を踏まえて読むと基歌の最後の部分「今日のひと日の灯り」の意味が分かる。「今日のひと日の灯り」を踏まえて読むと、反歌は力を持つ。このようにして、叙事と基歌と反歌は響きあう。

この長歌の様に現代の日常生活をさりげなく読む事によっ

て長歌は現代の長歌としてよみがえり、息づく。

叙事から基歌の最後の部分そして反歌という流れ・繋がりがこそが、長歌の命である。石塚立子の『白馬岳に夏』の基歌の最後「崩るるが響き聞こゆる戦きを心に抑へ頂めざす」。その反歌「頂に霧湧きあがりブロッケン^{もとうた}の輪の中に見る己は手をふる」。そして佐伯朋子の『東山雲巖寺』の基歌の最後「観光の波寄するなく霊境の莊嚴にして往時へ誘ふ」。反歌「若き僧掃きある庭の夕暮れを咲ける芙蓉の淡きくれなる」などは、叙事から反歌までの特性をうまく活かした現代詩と言えよう。今日、長歌を読むとき、私達は、現代詩を読んでいるのだという事を忘れてはならない。

現代において私達が作る長歌は、現代詩である。

長歌は、叙事の客情から作者の主情へと進む流れを教えてくれると同時にもうひとつ大切なことは、言葉のリズムつまりしらべを教えてくれることである。

四万温泉

渡辺 幸子

ふきのとうたらの芽早わらびぜいたくに季節味わう四万の宿朝の湯入れば川向こう猿の一家の渡りたる雪の残りぬ遠き山コバルトブルーの奥四万湖静まりてあり里人の祈り凝縮薬師堂(以下略)。この歌の調べをあげていただきたい。この作者の長歌「収穫祭」の調べも良い。長歌は、句読点や一字あけの空白も用いずに流れるようにすらと読めるリズムを教えてくれる。日本語には、句読点がなくとも、すらすらと読める特性がある。この日本語の特性を十全に活かす時、そこに調べが生まれる。調べは、短歌の命である。長歌を通してその調べを学ぶことができる。

壮絶に人生と戦い続けた歌人加藤かず子を悼む

高崎 邦彦

「老母の死を追う様に愛犬にまで先立たれ、一人取り残された私が心の空洞を埋める術もなく悶々とした日々を過して居りました頃、友人から一冊の歌集を頂戴致しました。胸を打つ短歌に魅せられて以来、古本屋を漁っては著名な歌人の本を買い込み読み耽っている内に、まるで子供の様に指を折りながらノートに思いの丈を吐き出していた。」

これは、平成十四年三月発行の生涯学習講座第四回合同歌集「鞆しづも」の中の加藤さんの文章の書き出し。加藤さんの歌は、最初から初心者の域を超えて強烈であった。癌の宣告を受け、闘病中に愛する夫と離別、母を失い、愛犬に死なれ、その心の闇の深さはいかばかりであったか。子を成す事も出来ず肉親に縁の薄かった加藤さんの孤独と悲しみは迸る様に言葉となって表出した。生きる為スナックを始めた加藤さんは店で働く女の子を我が子の様に慈しみ面倒を見、女の子達も母の様に慕った。しかし加藤さんの心を埋めるには決して十分では無かった。夫と復縁を果し初めて得た幸せも数年で夫の死をもって終った。常に控え目で相手を思い遣るやさしい加藤さんにこれ程の人生の試練を与えたのはいったい誰であり、何の為であったろうか。加藤さんは常にそう自問したに違いない。そして加藤さんは壮絶に戦いを挑み続け、不治の病魔に犯され力尽きた。私は加藤さんとの出会いに感謝し加藤さんを生涯忘れることはあるまいと思う。

加藤かず子さん遺歌二十首

照山 好子 選

いつしらに胸の奥処に定まりぬひとつを秘めて迷いを棄てる
夜のシャワー仮面を剥ぎて哭く吾の鎮もるまでの声をかき消せ
時ならぬ激しき雨に咲き揃ふさくら花叢地を彩れり
さくら貝うす紅色のひとつらに壱岐の渚の愛しき記憶
一人にはせぬよと笑みぬ夫の眼に寂しさ淀む梅雨走る午後
限りある夫の生命と真向いて二人で辿る秋の下北半島
硫黄の香たち籠む山や恐山うつつ離れの視界が開ける
この山に降りませ黄泉の亡父母よ悲嘆にくれて惑う娘のため
つれづれに想ひ出語る旅の夜は夫の腕の首に温とし
月の光傍への君を透かし逝き吾が影一つ映すは惨き
仏壇に亡夫の携帯そなへ置き返信のなきメールを打ちぬ
墓碑に記す亡夫の没年その傍へ朱の法名の吾は寄りそいゐ
しろがねの雪の降り積むこの朝奥つ城の辺に思いを馳せる
疾くこよと彼岸の夫の呼ぶ声の潮騒にのりはつか聞こゆる
なきぬれて虚ろに籠る窓の外嘲笑うがに桜咲き満つ
七十の齢に重し難病の妻の介護に明け暮れる兄
薨作内の日は「海のオルゴール」読み返す高崎先生より賜はる勇氣
蘇り夫よ顕ちませ底冷えの墓よりいでて共に帰らね
惚けしも生業なれば段取りは三十五年の身が覚えをり
生業は寡婦三年を否応なく生きる術とし吾が背を押す

第十二回太陽の舟全国大会詠草

1 吹く風に耳をとられてしみじみと夫ありし日が身に沁みにけり
2 没日^{いりひ}いま二の字の雲の間にあり楳^{あひ}円の形に朱の滴る
3 麻酔から醒めしベッドにまづ見しは真綿のやうな君の温顔
4 森深くこげら穴あけ鹿皮を剥ぐ樅の木耐えて雪解けを待つ
5 春を呼ぶわが古里の風物詩「八百燈」が白き闇灯す
6 街路樹のあはひ連なる石燈籠 知覧の街に兵をしのびぬ
7 初めて手に主宰の言葉創刊号ひたに読みけり桜花咲く下
8 厨辺に朝の光の差し込みて夫の帰り来階段の音
9 雑炊に並ぶ人おり上野美術館^{びじゅつかん}に並ぶ人おりみな生きるゆえ
10 柔らかき光の踊る富士雪解桜^{ふじゆまげ}を写して音なき世界
11 逝く春を惜しみ佇む老いの背に春よゆくなと隅田の川風
12 生き生きて欺くやあらむか木蓮の清しみどりば花供養せり
13 捨てられず片付けられず困ったなあ思い切りも時に必要
14 満開の花もいつしか葉櫻に八重櫻の花今盛りなむ
15 吾遺し三十三歳で逝きし母締めし帯地の肌をなぞれり
16 娘の家族一時帰国に食べさせたし山菜天麩羅冷凍にする
17 ひとしきり桜散りゆく山内に俗世隔てしとき止まりぬ
18 旅行鞆置きつ放しで観光のできる安けさ浅虫の駅
19 ひなもすぎ祭もすぎしさびしさを朝影とみむ青柳の雪
20 祈り込め折りし千の鶴羽ばたきて友の病魔を宇宙に持ち去れ

6月27・28日於：明賀屋本館

- 21 早曉のラジオより流るオカリナの澄みし音色は眠りを誘ふ
22 購ひ集め陋屋埋めし本の山紙屑となり処置なしと悔悟
23 教室に化粧の匂ひ満ちてをり入園式の母の装ひ
24 クラスメート九人吾が家に集ひしも三人になりて仮名文字を書く
25 濃く淡く若葉色に桜ませ里山彩る生命のパレット
26 遠方より来し嫁なりとうかららは姑^{はは}亡き後も米持ち呉るる
27 足よわき妹に届ける春弁当桜花びらとフキと筍
28 漆黒の闇にあがきて目覚めけり真夜の静寂月明かりさえ
29 はなみづき咲く時計台に腰やすめ百近き翁に活たまはりぬ
30 干涸びてまなこ失せるる死の果ての守宮の眼窩闇を抱きて
31 空と海の未知なる深み渡る鳥の旅立つこえは祈りにも似し
32 大磯に産声あげし太陽の舟ふねに乗りたる数多^{うた}の短歌人
33 しらしらと雨後の夕光射し入りて子の入院にのぞみを繋ぐ
34 おさな名をよばれふりむく寺庭にさと人の笑まふお彼岸参り
35 病みつつもひたすら生くる夫とある過ぎしかなしみ裡にとざして
36 人生の指南書並ぶ古本のこの棚百円プライド持てよ
37 昏れ残る薊をかごに刈り入れて畑より夫の自転車に帰る
38 自転車の少年の一群走りすぐユニホームの白薫^{くんぷう}風にのる
39 「嫁です」と嫁は知人に頭下げ少女の顔して吾に寄りくる
40 晩春の遅霜に震えうろたえて籠もり重ね着食慎ましく

第十二回太陽の舟全国大会詠草

- 41 甘糧の丘にのぼれば明日香風古都忘るなと甚振^{いたぶ}り吹けり
42 百年をいかに生きなば慈母の笑み老い汚れなき今日迎ふらむ
43 少年に育ちゆく子の応答の反抗となりてかへり来
44 月の笛かすかに響く短夜を嬌恋キャベツは闇包みゆく
45 ぼんやりと満たさぬ時が過ぎてゆく埋めることなし小さな日常
46 「SL」といふ言葉嫌ひし亡父^{ひとよ}なりき一生を捧げぬ蒸気機関車
47 掌にばんと山椒の葉筍に添へ若夏誘ふ
48 まばたかず紅さす吾を見つめる老母^{はは}の脳^{なづき}の正気を探る
49 ブナ若葉日ごとに茂りさはさはと風起こすなり大きな空へと
50 散歩道鴉が一羽電線に 真昼の月が天空の位置
51 一望の芝ざくら映ゆ濃淡のピンクの絵柄果てなく続く
52 物忘れ今日の迂闊を数へてたそがれどきの寂しさに居る
53 一陣の風にひかりて桜花降り直情に似てわれの眩しむ
54 人工の干潟ぞ稲毛ボラ跳ねてアジサシも舞いひねもす遊ぶ
55 耳鼻科には幼稚園ほど子供おり待合室を怪獣走る
56 子規大人と私淑し生を詠み残す叔父もカリエス病魔に泣けり
57 幾年も手話習ひしが口読めぬ筆談となり己かなしむ

七首選歌してお集り下さい。

当日参加の方、投稿のみの方は、前もって支部長さんにお出し下さい。
六月二十七日（月）午前十一時那須塩原駅集合・明賀屋宿泊。

歌会報告

本部歌会 4月例会(第362回)

(松本記)

日時 4月10日(土) 13時~16時40分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 27名 出詠 32首

司会 生稲 進同人

冒頭、代表から伊那の山に建つ阿部師の歌碑を訪ねられた信州の方からの詳しい手紙と写真を回覧されました。

御子息正大氏のイベントからめぐりめぐって、代表との手紙の交流となった奥床しいいきさつでした。

今月の阿部師の一首

・盲目の鑑真こそは知り給ふ父を謀りて殺せし者を

(白馬寺幻想) は名文であると読まれました。

盲目なればこそ見えるものがある。姉と母に次いで父を亡くされて間もない頃の思いをうたわれました。

当日の高得点で、代表の絶賛せられた二首

・陸橋をひとり飛び跳ねゆく男の子春の雲居へ^{かけ}翔てゆくらむ

佐伯 朋子

・子の在らばわが死せし後のこまごまを云ひ継ぐほどのしづか夜なりき

庄司 久恵

・洪谷支部 支部長/志賀 倭子

(河野記)

日時 4月10日(土) 10時~12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 9名 出詠 9首

司会 河野 静子

・息子の付けし煙探知機早々に役立つ迂闊に老い深まりて

志賀 倭子

・卒業の名簿に孝の字一人のみ子等に頼らぬ世相迫れり

「二人のみ」は、「ただ一人」がいいとなり訂正となりました。

最近が変わった読みかたが多くなり、考えてもみなかった

孝の字、妙に納得したひとときでした。

三月号は、佐伯さんと私河野の歌の評を頂きました。

水戸支部 支部長/長須 正文 (塩田記)

日時 4月11日(日) 13時~15時

場所 みと文化交流プラザ

出席 6名 出詠 11首

司会 塩田 秋子

ミニ講義は小泉^{みづみ}三の青春のうたを鑑賞した。歌会では言葉のバラエティが広がり又深くなっているのを感じた。

・人住まぬ広庭なれど庭隅に紅梅白梅華やぎて咲く

黒羽 紘子

品川支部 支部長/久保田昭江 (吉田律記)

日時 4月15日(木)

場所 旗の台シルバーセンター

出席 5名 出詠 10首

司会 吉田 律子

4月と思えぬ寒い小雨降る中、久保田、松本、吉岡、吉田、

福永5名の出席にて定時の午後1時に集まり、雑談の後1時半頃より黒板に貼られた10首について順番に意見を交わした。

司会は初めて吉田律子を受け持ち4時頃終了した。いつも乍ら夫々言いたいことを言って笑いの多い楽しい会であった。

・長崎の被爆者竹山宏逝く『眠りてよいのか』の短歌のこして10首の中で右の松本啓子さんの一首が重みのある作品だと思いました。

柏支部 支部長／末次 房江 (末次記)

日時 4月16日(金) 12時～15時

場所 アミューゼ柏(A)

出席 7名 出詠 18首

司会 末次 房江

四月も半ばを過ぎたのに、寒い雨の日、欠席が多く、少しさみしい会でした。新しく参加された野口勝様が意欲的に本を紹介されたり、活発な意見が交わされました。

・天井の羽根は小さく風回しストローに飲むぬるき椰子の果

千葉支部 支部長／照山 好子 石塚 立子 (渡辺記)

日時 4月17日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

出席 12名 出詠 14首

司会 森五貴雄

三月の堀井さんに続き加藤かず子さんの訃報が知らされました。暖かなお人柄と内に秘めた熱情を詠った歌を多く残され、素晴らしい歌人でした。寂しいです。合掌

歌会は英国での勉学を終えて帰国された豊島さんが出席され、今後も若い活力を期待します。堀井さんを偲んでの歌も三首寄せられました。

・補助器具に助けられつつ暮らす母時おりみせる恥じらいの笑顔 角本 静江

・花あかりに鉄棒校庭仄かなり廃校決まりし吾子の学舎 渡辺 幸子

・茫漠と白一色の大雪湖弥生の青き空を拒めり

水戸支部 支部長／長須 正文 高崎 邦彦 (塩田記)

日時 4月18日(日) 10時～12時

場所 岩間公民館

出席 4名 出詠 10首

司会 深谷 充代

欠席が多かった。新学期のせいでしょう。互いに添削及び鑑賞を熱心にし、6月の大会のことを話し合った。

・春浅き田んぼの小道に出遇ひたる雉子は逃げずに辺り窺ふ 深谷 充代

計 報

加藤かず子会員(千葉支部)が3月27日逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

太陽の舟短歌会